

## いのちに寄り添う手

ゆったりとした音楽をかけながら、ある患者をマッサージしていると、傍にいた娘さんがかすかな異変に気づいた。

「……お父さん？」

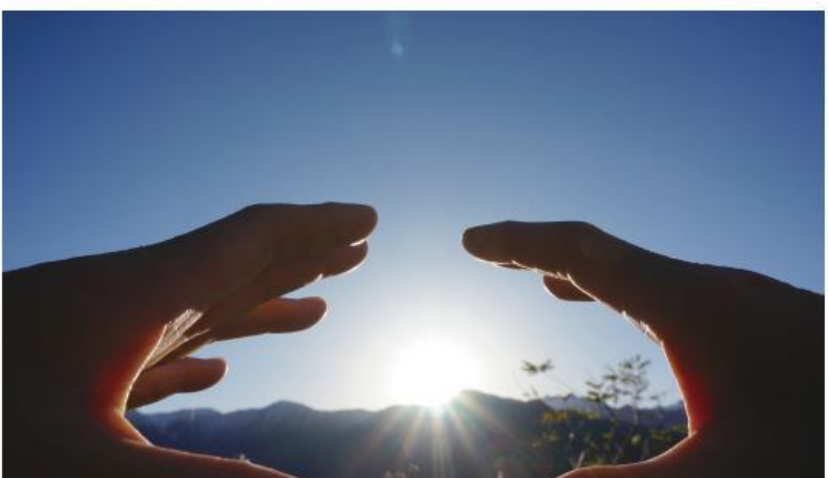
患者は静かに息を引き取っていたのだ。その家族はあとで看護師に言ったそうだ。

「気持ちいいマッサージを受けながら、亡くなった父は幸せでした」

先日、末期がん患者の臨終に立ち会ったのはアロマセラピスト・音瀬

惠津子さん（48）。看護師からマッサージの手を止めるよう促されるまで気づかなかったという。生と死の境目が無い、それほど穏やかな最期だった。

彦根市の自宅でアロマセラピサーロンを営む音瀬さんは、市立病院の緩和ケア科でボランティアをしている。緩和ケアは延命ではなく、穏やかに終末を迎えてもらうために、がんの痛みをコントロールする治療を専門に行なう。彼女はこの病棟で月



二回、希望する患者に施術をしている。「音瀬さんのマッサージなら受けたい」と指名されたり、難しい患

者を任されたりすることも多い。しかし同じ患者に何度も施術することはほとんどない。次の活動日には亡くなられていることも日常だからだ。

音瀬さんは親をがんで亡くした。母の臨終には立ち会えなかった。だから父のときは看取りたいとそばにいた。眠れないほどの痛みに苦しむ父。その背中を一心にさすっている。と、すーっと寝入ってくれた。そのとき手の持つパワーを感じた。この手を使って人の役に立つ仕事がい。いや、する運命なんだ。会社員から転身してセラピストの道に進む。

アロマセラピーは健康食品、鍼、灸などと並んでがんの補完代替療法に取り入れられている。アロマオイルのマッサージもリラクセーション

や痛みの緩和に効果があるとされる。だが彼女は悩んだことがあった。患者に施術できるわずか二、三十分の間、痛みを少し和らげてあげたからといって、患者は本当にありがたく思っているのだろうか。

「ボランティアする私のエゴなんじゃないか」

そんな気持ちで活動を続けるなか、あることに気づいた。痛みを和らげてあげる、というの上から目線である。患者とセラピストの関係はフラットだ。する側、される側、ではなくお互い穏やかであればそれでいい。そう思えたら肩の力が抜け、施術が楽しくなったという。

「私は患者さんから幸せをたくさんもらってるねん」

自分がしたことで喜んでくれる、人の役に立っていると素直に感じられるようになった。

緩和ケアは常に、死が隣にある過酷な現場である。脆弱なメンタルでは通用しない。しかしそこに居場所を見つけた。心身ともにコンディションを整え、その「手」で患者のいのちに温もりを伝える。安らかな最期は、患者にも遣される人にも大切だということを身を持って知ったのだ。

「緩和ケアは、私のライフワークから」

音瀬さんは今日も、そっと病室のドアをノックする。